

## 中平解先生の「記憶」

(『ももんが』第四十七巻第三号、2003年三月号「中平解先生追悼特輯」所収)

秋田の高校(大館鳳鳴)を終え、東京教育大学に入ったのは昭和三十四年、言語学専攻の私が中平先生の講義に出席しはじめたのは、その二年後でした。当時吉祥寺に住んでいた私は、大学に行くのにときどき電車を荻窪で下り、新宿から荻窪まで伸びたばかりの地下鉄に乗り換えて茗荷谷に通っていました。国電をお茶の水で乗り換えるより、十分ほどよけいにかかりましたが、なにか短いものを読んだり、ぼんやりして過ごす私には都合がよかったのでした。その地下鉄荻窪駅でのある朝、それまで講義中(十人をこえることはめったにない)のお姿しか知らなかった中平先生をお見かけしました。その後同じ場所でお会いしたときは茗荷谷まで一緒に、先生は私にいろいろなお話をして下さいました。先生は私と同じ武蔵野市にお住まいでしたが、私の高校の名前を聞かれた先生が、「それではあのコーちゃんの…」と言われたのには驚きました。大館鳳鳴の増田恒一校長は先生の一高時代の友人だったのでした。

東京教育大学というところは優秀な先生が多い、ということは聞き知っていましたが、私が大学院生のときは学長の朝永振一郎教授がノーベル賞を受賞されました。しかし文学部の、とくに外国文学部門では博士がめずらしかった時代でもあり、そのなかで中平先生は三十歳代で博士号をとられたフランス語学の俊英として知られていました。

当時、中平先生ほか、東大の朝倉季雄、慶応の松原秀治、秀一父子、外語大の家島光一郎、田島宏、都立大の三宅徳嘉といった諸先生による「フランス語学会」という会があり、中平先生はその創立者の一人でした。この学会は後に、鈴木信太郎会長時代の「日本フランス文学会」に統合され、あらたに発足した「日本フランス語フランス文学会」の一語学部門となって、中平時代の「フランス語学会」独特の気品のある雰囲気は消え去ってしまいましたが、これは日本のフランス(語)研究にとっては残念なことでした。

鈴木信太郎会長のもとで中平先生は副会長を三期ほどつとめられましたが、拡大した学会より、古い語学会仲間への愛着が強かったようで、合併された後も年に数回開かれていた旧「語学会」は、「学会」というよりも、昔のエリート中学の同期会のような趣がありました。いつか駒場での「学会」のあと、駒場東大駅前の喫茶店で、中平先生が、格好のよい五分刈り頭の松原秀治、パイプをくわえた家島光一郎と一緒に、あと何年生きられるだろうか、ということをしひそと、しかし子供のように楽しそうに話していたのを思い出します。

有名だがほとんど誰も通読した者がいないという「フランス語学探索」とか「フランス語学新考」といった著書だけでは中平先生の学問はなかなか伝わりにくいものがあります。「フランス語学特講」という名の講義をうけもたれていましたが、その講義に律儀に出ていると同じことでした。五人も出席していれば多い方だった大学院の講義のあと、「このフランス語学講義とはいったい何なのか」というような、知らない人が聞いたら驚くようなテーマでわれわれ残った学生はよく議論したものでした。

受けた講義で覚えているのは、フランス語の選択肢をあらわす表現、soit ... soit ... (...であれ ... であれ)についての通時的、共時的観点を越えた考究です。例えば、Soit (par) ignorance, soit (par) crainte, il n'a rien dit (知らなかったからか、恐れていたからか、この男はなにも言わなかった)というような表現について、講義は、さまざまな近代小説(といっても主たる資料は十九世紀後半と、二十世紀前半のもの)からとりだした例文をひたすら板書したり、ガリ版刷りのプリントでわれわれに提示することに費やされました。結論はふつう「(グレヴィスのような)文典にはしかじかの説明があるが、実際はこうではあるまいか」といった地味なものでしたが、先生の方法は辞書や文法書を博搜しながら抽象観念に陥ることなく常に具体的でした。つまり御自分で納得するために先生は、目に連動した頭脳の承認を必要としていたのです。

先生の方法論は動植物の名前といった、ほとんど固有名詞に近いものについてのフランス語と日本語の違い、さらには同じ記号で示される物自体の違いの考究に収斂されていきました。こうなると講義は言語学というよりはむしろ博物学に近いものになります。ときどき出席するだけの学生がこうした講義に驚くのは無理のないことでしたが、中平先生の講義には常になにか人を感動させるものがありました。

この感動はいったいどこから生まれたのだろうか。宇和島中学四修で一高に入学し、東大に入ってから「新人会」に入会した先生は、「貧乏」というものが宇和島と東京ではまるっきり意味が違うという現実を、東京でしばらく体験されていたのでした。大学一年の時には関東大震災があり、同期で三高から入学した河盛好蔵は東大が休校になったのを幸い、さっさと京大に移っていますが、先生はこの休校をきっかけに大学の講義をサボりはじめたのだそうです。

中野重治（彼は四高で落第しているから中平先生より年上）は長篇『むらぎも』に先生を登場させていますが、親友だった中井精一といい、つきあいが終生続いた石堂清倫（四高に四修で合格）といい、先生は東大同世代の左翼文学青年（深田久弥もいた）に強烈な印象を与えています。中野重治研究家の満田郁夫氏によれば、先生は当時中野重治より過激なものを書いていたようです。

一高に中学四年修了で合格することは都会出身の秀才にもむずかしいことだったのに、中平少年は首都から遠く離れた四国の片田舎から、当然のごとくに出て来られたのでした。実は受験のために四国から上京すること自体、数日かかりの難行であり、やれ船や汽車の手配、それに道中の人々の奇跡的親切がなかったら先生は東京に辿り着くことさえできなかつたようですが、そうした「前世」の苦勞は先生にはまったく刻されていませんでした。四修合格者として高等学校の事務官にも敬意を払われていた中平先生は、朝永振一郎教授と共通の雰囲気があり、お顔も目も現代の日本人のそれとは違ったものでした。

さて、近代日本のこうした小学、中学秀才の頭の構造はどのようなものだったのだろうか。ある種の抽象能力、原理の組み合わせとその応用力、といったものはもちろん必要ですが、こうしたものよりまして、後天的な努力と関係のない、記憶力という、感性に支えられているだけ天性のものである能力が学力の中核を成しています。大人においては使い方次第では役にたたないどころか、やっかいのもとになりかねないこの能力は、少年時代の学業成績を支配する力のなかでもっとも重要なものです。数学でさえ、小中学校においては論理力より機械的記憶力がまさります。中平先生の記憶力は抜群でした。

先生は晩年記憶の衰えを気にされていましたが、それを気にされること自体、御自分の記憶の、人と違うことを意識されていたと思います。書齋の先生のお

手許には分厚い名簿（一高同窓会名簿）があり、知り合った人の名や昔の印象的な出来事を決して忘れないように努力されていたようでした。記憶の結論は推論による結論にまさる、と先生は考えておられたのかも知れません。先生は人の名同様、物の名を忘れたり、御自分の言葉で表現できない事態を恐れていたようです。

詩人宗左近は先生の告別式で、「中平さんは日本第一の詩人である」と言いました。言葉と物との相関をきわめる事が文学であるとしたならば、その相関を常に気にしておられた中平先生の感性は、実はきわめて文学的なものだったと思わざるをえません。先生の同僚であり、数々の文学賞を受賞された河盛先生から私は「語学」の実際的大切さを学び、中平先生からは「文学」のすばらしさを教わったのでした。